

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	鏡の間：六年生「静夜思」の体感を問う
Author(s)	内藤, 茂
Citation	児童の言語生態研究, 19 : 119 - 120
Issue Date	2018-10-27
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046628
Right	
Relation	



静夜思

S・K

静夜思

T・R

「静夜思」の
体感を問う

静夜思 李白

床前看月光

疑是地上霜

举头望山月

低头思故乡

とつぜん目が覚め、空にかがやく月を見た。

地面を見ると月の光を反射した霜を

見たが、その姿が美しすぎて、この世

界のものかと、疑ってしまった。

頭を上げれば山に望む月が見えた。

頭を下げると、月と地の対比を感じ

られ、

その姿は自分が昔いた故郷にいてい

て、ふとなつかしい香りを感じた。

月の光

消える夢幻

ふと思つて

下を見れば

月の光

霜となつて

地にふりそそぐ

山を見れば

月の光

ふりそそがれ

月の光

全てに降る

故郷に降る

「静夜思」の世界に、身体感覚を揺すぶられたのでしよう。身体に染みついた記憶、におい・香りとともに一つの世界が立ちのぼっているにちがいない。
S君、十二歳が体感を放していないことに注目したい。
(編集部)

夢から覚めた。だが、そこは月の光の降る世界、もうひとつの夢の世界。

降る月の光に包まれて、遠い故郷もある。

望郷の思いではあっても、一体感であるので切なくはない。
(編集部)

静夜思

T・M

突然目が覚め、月の光をみる。

ふりそそいでいる光が、霜が降り立つように見える。

頭を上げて、山や月を見ていると、

頭を下げ、故郷を思っている自分がいる。

「故郷を思っている自分がある」と、ここに注目させられた。月夜の景色の中にいて、気がつけば望郷の思いに駆られている自分の姿が見えている。「静夜思」を素直に受けとめたからにちがいない。観照の視点と受けとめきか。望郷の思いなど、十二歳の子どもたちにあるはずのないことにも思えるが、しかし、共感を生じている。それは、月の光と闇がイメージ世界の深部にまで届くからではないか。

(編集部)

静夜思

H・M

病で倒れ床の上、月の光

地上の霜 なのだろうか

月は私を助けたのだろう

故郷よ 私は助かったぞ

誤読だと思う人がいるかもしれませんが、やはり、体感を揺すぶられ、思いがけない世界がひろがったということでしょう。月の光と闇は病という体感となってH君を包んだ。そして、また、月の光ゆえに蘇生した。月夜という世界、白い光に包まれて、昼間には感じることはない、自然の力を感じている。それ故「故郷よ」という呼びかけにもなる。

(編集部)

小学生の国語の授業でも漢文を扱った実践が散見できる。

ところが、そのほとんどが漢文の読み下しという、文法的に日本語に翻訳したものである。授業の構造として古くから行われている英語教育と変わらない。漢文の素読は永く心に残っても、日本語に訳してしまったら詩の本当の価値は心に残らない。ピートルズを訳

詞で歌うようなものだ。

漢文や古典を現代の日本語に訳さず、漢字(漢語)や古語から読み、イメージを動かしていき、そんな授業のきっかけを作った。本校では小学校入学から論語をはじめとした漢文、古文を繰り返し素読させている。自分の声とリズムが自分の耳に入り、脳を刺激する。「聴覚」という知能因子を常に刺激するのだ。脳は通常、必要のない情報を4日で消去する。素読で学んだ漢文は、卒業後何年もたつてから、ある日「これだったのか!」と気づくのだが、それは脳が何年も何十年も意味を追い求め引き出しにしまっておくからだ。

李白の『静夜思』は本校の「素読讀本」にはないが、対句の働きと一字一字の漢字のイメージが読み手を触発する。なによりも「静かな夜にももの思う」というシチュエーションが子ども達のイメージネーションを動かしてくれる。中には本来の意味とは違う場面も描かれるが、それはほかならぬ、その子自身の世界を描いている。

また、今回は「自分なりの表現で組み立てなおそう」と指示したため、子どもなりに推敲がなされている。いみじくも李白がこだわったように、李白の詩を投影影とし言葉にこだわりを持ってくれたようだ。

(報告 聖徳学園小学校教諭 内藤 茂)